

# 【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

**演 題** 少数歯残存に対し、インプラントを応用し咬合回復を行った一症例

**演者名** 森永博臣

**日 付** 2007年5月29日

## keywords

1. CR
2. 咬合高径
3. インプラントの埋入位置

## 抄 録

私の医院では、いまだ重度歯周病の患者が多く、抜歯を余儀なくしなければならない症例が多々ある。しかし、患者の要望は高まりつつあり、要望をみたすために複雑な治療にチャレンジしていく必要にせまられている。今回も重度歯周病が原因で残存歯が1本となったにもかかわらず、固定式修復物を希望された患者に遭遇したので発表する。

患者様は62歳男性で2003年5月26日、咬めずに食事が出来ないという主訴で来院した。来院した時点で重度歯周病のため、すでに歯列は完全に崩壊しており、右上3以外の残存歯はすべて抜歯と診断した。患者は固定式補綴を希望したため、上顎に12本、下顎に8本のインプラントを植立し、咬合回復治療を行った。

治療としては、まずプロビジョナルデンチャーを作成し、顎位の模索と決定を行った。その際上顎前歯の形態・ポジションは残存歯を参考にした。顎位が決定した後、診断用ワックスアップを行い、インプラント埋入時のサージカルステントにその情報を反映した。サージカルステントを応用してインプラント埋入し、プロビジョナルレストレーションにて顎位・咀嚼・審美・発音を確認し、最終補綴物へと移行した。

しかし、最終補綴物はインプラントポジションが情報と違ったため審美性、清掃性などの面から、ラボサイドに負担をかける結果となった。結果を踏まえて、失敗の原因および解決策を述べさせていただきます。

諸先生方のご指導よろしく申し上げます。